

ロックになったクラシック～ROCK X LASSIC (Rock Luvs Classic)

私、森雄一は昔からテレビよりもラジオを好んで聞いていました。AM、FM、短波(!)、いろいろ聞きましたが、やっぱり音楽が流れてくるとホッとしたものです。気に入った曲が流れると、曲の終わりにDJが紹介するのを待ち、ボリューム上げてメモってました。FM雑誌を買って、お目当ての曲が流れる予定の番組を探し、カセットテープをセットして待ったこともありました。

音楽の経験値が増えていくと、時に、「あれ?これって何かの曲に似てるな」と思うことがありました。インターネットなんかない時代。調べる方法はただ一つ。「人に聞く」(中学生だったしね)

同じ音楽を愛する兄に聞いたり、学校で友人に聞いたり。1年、2年と時はたち、社会人になっていたある日、カーラジオから聞こえてきました。ビリー・ジョエルの「This Night」。この曲が流行った当時、「あれ?」と思ったことを思い出し、同乗していた友人に軽く聞いてみると、「ああ、これってバッハ(正確にはベートーヴェン)の曲を使ってるんだよね。」という答えが!

何と、クラシックだったのか。道理で、聞いたことがあってもよく知らなかったわけだ。10年以上もやもやしていたことが解決するって、すごい気持ちのいいものです。

今回、OTTAVAからコンピレーションCDの選曲をしてもらいたいとお話があり、私がやりたいと思ったのは、上記のような経験を元に、あなたにより多くの音楽を知ってもらいたいということです。

現代のロックやポップスに、クラシック音楽のエッセンスを取り込んだものは多く、クラシックを知っていれば、思わず「ニヤリ」としたり、反対にクラシックを知らないのであれば、古き名作を知るチャンスにもなります。現代のアーティストはクラシック作曲家に尊敬の念を持ち、名作の力を借りて独自の世界観を構築しています。もし、クラシック作曲家が生きていたら、自身の作り上げたメロディが時代を超えていかされて、どのような気持ちになるのでしょうか。

そんなことを想像しながら聞いてみると、このアルバムがより楽しめると思います。是非、ネタ元を聞いていただいて、現代のロック・ポップスも聞いてみてください。

森 雄一

～収録曲について～

1.ゲオルク・フィリップ・テレマン(1681-1767):トランペット協奏曲 二長調 TWV 51:D7 - I. アダージョ

[ミロスラフ・ケイマル(トランペット)/カペラ・イストロポリターナ/ペーター・スクヴォル(指揮)] (Sweetbox/Cinderella)

ドイツの作曲家、ゲオルク・フィリップ・テレマンによる18世紀の作品。ドイツの音楽ユニットSweetboxは、1995年のデビュー当時からドイツ国外での評価も高く、クラシックの名曲をサンプリングする形で知名度を世界レベルにした「Everything's Gonna Be Alright」は日本でも大ヒットしました(1997年)。4代目のボーカルJadeを迎えた2001年のアルバム「Classified」からもヒットを連発し、そのうちの1曲が「Cinderella」。繰り返し、テレマンのトランペット協奏曲の冒頭部分が流れ、それに合わせてJadeが歌っていきます。昔も今も変わらない、女性のあこがれ、シンデレラに思いを馳せて…

2.エリック・サティ(1866-1925):3つのジムノペディ - ジムノペディ 第1番

[クララ・ケルメンディ(ピアノ)] (Janet Jackson/Someone To Call My Lover)

フランスの作曲家、エリック・サティによる1888年の作品。80年代から息の長い活動を続けるJanet Jackson。21世紀最初のアルバムとなった「All For You」は大ヒットし、ジャクソンファミリーの底力を見せつけました。アルバムからの3枚目のシングル「Someone To Call My Lover」は、ロックバンド、Americaの「Ventura Highway」のメロディに詩を乗せ軽快に歌っていますが、サビで聞こえてくるのはサティの名曲の一節。2つの楽曲をサンプリングすることによって、これまでにないユニークな仕上がりになっています。

3.セルゲイ・ラフマニノフ(1873-1943):交響曲 第2番 ホ短調 Op. 27 - III. アダージョ

[スロヴァキア放送交響楽団/スティーヴン・ガンゼンハウザー(指揮)] (Eric Carmen/Never Gonna Fall In Love Again)

ロシアの作曲家、セルゲイ・ラフマニノフによる1907年の作品。幼い頃からピアノやヴァイオリンを習っていたエリック・カルメンは、特にラフマニノフを好んでいましたが、ロックも好きで大学に進学すると友人とロックバンドを始め、後に、70年代前半にヒットを連発したラズベリーズを結成。75年からはソロに転向し、「All By Myself」、「Never Gonna Fall In Love Again」と、2曲のスマッシュヒットが誕生。いずれもラフマニノフの楽曲をモチーフにしていて、明るく失恋を歌う「Never Gonna Fall In Love Again/恋にノータッチ」は今でもラジオでよく流れます。カルメンなんて、名前からしてクラシックですね。



4.セルゲイ・プロコフィエフ(1891-1953):組曲「キージェ中尉」Op. 60 - II. ロマンズ

[スロヴァキア国立コシツェ・フィルハーモニー管弦楽団/アンドリュウ・モグレリア(指揮)] (Sting/Russians)

ロシアの作曲家、セルゲイ・プロコフィエフによる1933年の作品。イギリスのロックバンド、The Policeのフロントマン、スティングはバンド活動休止後、ソロアーティストとして数々の名曲を生み出しています。1985年、ソロ初となるアルバム「ブルータートルの夢」に収録されている「Russians」では東西冷戦について触れていて、プロコフィエフの「キージェ中尉」のメロディを印象的に使用しています。ライナーノーツには、「この曲を使っています」と丁寧に書かれていて、そのパートの楽譜まで載せていたのにも驚かされます。すでにアルバムを聞き込んでいた私ですが、ある日、自分の番組で「キージェ中尉」かけた時、メロディを聞いて「ハッ」としたものです。

5.ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-1791):レクイエム 二短調 K. 626 - セクエンツィア 第6番「涙の日」(ラクリモサ)

[スロヴァキア・フィルハーモニー合唱団/スロヴァキア・フィルハーモニー管弦楽団/ズデニェク・コシュラー(指揮)] (Evanescence/Lacrymosa)

オーストリアの作曲家、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトによる1791年の作品。モーツァルト晩年の名作「ラクリモサ」は、OTTAVAでもリクエストの多い1曲です。アメリカのゴシックメタルバンド、Evanescenceのボーカル、エイミー・リーは大のクラシック好き。幼い頃からピアノを習う一方、学校でも合唱隊に所属していました。中学校の同級生とバンドを組み、2002年にメジャーデビュー。前評判の高かったバンドだけに、彼らはグラミー賞の最優秀新人賞を受賞しています。2006年の3枚目のアルバムからのヒットシングルである「Lacrymosa」は、モーツァルトの同名曲のメロディをいかし、極上のナンバーに仕上がっています。

6.ジャン・シベリウス(1865-1957):交響曲 第5番 変ホ長調 Op. 82 - III. アレグロ・モルト

[アイスランド交響楽団/ペトリ・サカリ(指揮)] (The First Class/Beach Baby)

フィンランドの作曲家、ジャン・シベリウスによる1915年の作品。イギリスのロックバンドThe First Class、ビーチボーイズを思わせる、彼らの最大のヒットとなった「Beach Baby」(1974年)。間奏になると、突然、聞き覚えのあるメロディが聞こえてきます。それが、シベリウスの交響曲第5番の第3楽章。抜けるようなホーンサウンドは、北欧では雪原が想像できますが、この曲を聞けば、ビーチいっぱい広がる青空を思い浮かべることでしょう。それにしても、ビーチボーイズっぽいの、タイトルが「Beach Baby」。かなり狙ってますね。ビーチボーイズと勘違いしてレコードを買った人もいたのでは？

7.ルッジェーロ・レオンカヴァルロ(1857-1919):歌劇「道化師」 - 第1幕 衣装をつけろ

[ニコラ・マルティヌッチ(テノール)/スロヴァキア放送交響楽団/アレクサンダー・ラハバリ(指揮)] (Queen/It's A Hard Life)

イタリアの作曲家、ルッジェーロ・レオンカヴァルロによる1892年の作品。Queenのボーカル、フレディ・マーキュリーはオペラ好きで、Queenの楽曲の中には、「ボヘミアン・ラプソディ」のようなオペラを思わせる壮大な曲もあります。1984年のアルバム「ザ・ワークス」からのヒットシングル「It's A Hard Life/永遠の誓い」は短いアカペラで始まりますが、これが「道化師」の衣装をつけろの一節から引用されています。これに気付けば、かなりのクラシックマニア?私はOTTAVAで初めて「道化師」を聞きましたが、楽曲の途中で、「これは!」と、大興奮したのを覚えています。

8.ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827):ピアノ・ソナタ 第8番 ハ短調「悲愴」Op. 13 - II. アダージョ・カンタービレ

[イエネ・ヤンドー(ピアノ)] (Billy Joel/This Night)

ドイツの作曲家、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンによる1798年の作品。ビリー・ジョエルの1983年の大ヒットアルバム「イノセントマン」からは「Uptown Girl」、「Tell Her About It」など6曲のシングルヒットが生まれていますが、「This Night/今宵はフォーエバー」は有名ながら本国アメリカではシングルカットされていません。ベートーヴェンの「悲愴」第2楽章という、極めて有名な曲を引用していることもあって、日本ではあえてシングルカットされ、よく知られています。この曲があったからこそ、CDができあがったのですわ。ビリーさん、ありがとう!

9.カール・オルフ(1895-1982):カルミナ・ブラーナ - 全世界の支配者なる運命の女神 - おお、運命の女神よ

[ボーンマス交響合唱団/ボーンマス交響楽団/マリン・オールソップ(指揮)] (Enigma/Gravity Of Love)

ドイツの作曲家、カール・オルフによる1936年の作品。グレゴリオ聖歌やカンタータを取り入れるなど、クラシックの本場、ヨーロッパを拠点とするだけに、その手法が非常にユニークな音楽ユニット。4枚目のアルバムとなった、2000年の「The Screen Behind The Mirror」からは「Gravity Of Love」というシングルヒットが生まれましたが、カルミナ・ブラーナの冒頭の楽曲を印象的に使用しています。PVを見ればエニグマの世界観が分かるかも。エロスを感じる、かなりミステリアスな仕上がりがです。





10.フレデリック・ショパン(1810-1849):前奏曲 第20番 ハ短調 Op. 28 No. 20

[イディル・ビレット(ピアノ)] (Barry Manilow/Could It Be Magic)

ポーランドの作曲家、フレデリック・ショパンによる1839年の作品。アメリカの音楽史に、数々の輝かしい実績を残すバリー・マニロウ。ソングライティングにも定評があり、「悲しみのマンディ」、「コパカバーナ」など、数多くのヒットを生み出しています。1975年のナンバー、「Could It Be Magic/恋はマジック」(全米6位)は、悲しげなピアノのイントロで始まりますが、これがショパンの前奏曲第20番なのです。歌が入るとオリジナルのメロディになりますが、エリック・カルメン同様、ネタ元を自然にオリジナルのメロディにつなげる才能には目を見張るものがあります。「Could It Be Magic」は、後にDonna SummerやTake Thatにもカバーされています。

11.ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー(1840-1893):組曲「くるみ割り人形」Op. 71a - III. 金平糖の精の踊り

[スロヴァキア・フィルハーモニー管弦楽団/ミハエル・ハラース(指揮)] (En Vogue/Love U Crazy)

ロシアの作曲家、ピョートル・チャイコフスキーによる1892年の作品。En Vogueは1989年のデビュー当時は4人でしたが、メンバーチェンジ時で3人になったり5人になったり、平均4人編成ですが、誰もがメインボーカルを務めることができるレベルの高いガールズボーカルユニットです。後にデビューするTLCやDestiny's Childも多大な影響を受けています。2000年にリリースされたアルバム「マスターピース・シアター」は完成度も高く、ダンサブルなチャイコフスキーは年末に聞くのにぴったりです(でも、このCDはほぼ新年リリースだった...)。ちなみに、アルバムジャケットがいいんです。美しく、美しく。

12.エドヴァルド・グリーグ(1843-1907):ペール・ギュント 組曲 第1番 Op. 46 - IV. 山の魔王の宮殿にて

[BBCスコットランド交響楽団/イェジー・マクシミウク(指揮)]

(Ritchie Blackmore's Rainbow/Hall Of The Mountain King)

ノルウェーの作曲家、エドヴァルド・グリーグによる1875年の作品。イギリスのロックバンド、レインボーのギタリスト、リッチー・ブラックモアが自身の名前を冠したバンドを結成。リッチーは自他ともに認めるクラシック好きで、レインボー全盛期でもクラシックの名曲を取り入れた楽曲を手がけています。1995年のアルバムに収録された「Hall Of The Mountain King」は、グリーグの名曲を、よりドラマチックにアレンジし、「朝」のフレーズも入れるほど凝った作りになっています。

13.アントニン・ドヴォルザーク(1841-1904):交響曲 第9番 ホ短調「新世界より」Op. 95, B. 178 - IV. アレグロ・コン・フォーコ

[スロヴァキア・フィルハーモニー管弦楽団/スティーヴン・ガンゼンハウザー(指揮)] (The Black Eyed Peas/My Humps)

チェコの作曲家、アントニン・ドヴォルザークによる1893年の作品。1998年にデビュー、2003年のアルバム「エレファンク」で人気を確立した4人組。メンバーの中心、will.i.amは自身のソロはもちろん、他のアーティストの曲も数多く手がけています。グループは無期限の活動休止中も、いまだに若いアーティストに多大な影響力を持つThe Black Eyed Peas。ドヴォルザークがアメリカに滞在中に作曲したという「新世界より」の、最も勢いを感じる第4楽章を引用している「My Humps」。この曲を聞いて、チェコの人がどう思ったのか知りたいところです。

かなりの有名楽曲がずらり13曲も並びましたが、同時にご紹介したロック、ポップスの名曲も集めて、同じ順番でCDにしてみてもいかがでしょうか。あなたのCDラックに刺激的な1枚が加わることを心より祈っています。

OTTAVA selection volume 4は高野麻衣選曲の「愛の小道～LOVE SONGS」(仮)

2015年1月下旬リリース予定

